

ニコラ・オットカールについて

清水 廣 一 郎

I

1957年にフィレンツェで没したニコラ・オットカールの中世都市研究に関しては、すでにすぐれた紹介が行なわれている。その結果、彼の到達したイタリア都市の特殊な性格についての結論、都市と農村の関係をクリテリアとしてヨーロッパ各地の都市を典型的に把握しようとする基本的視角については、すでに充分明らかにされているといえよう¹⁾。その結論自体に関しても、又その持つ重要性についても、さしあたって私がつけ加えるべきことはない。しかし彼の問題の構造に関しては、その全体的なより深い理解のためにも、なお検討されるべきものが多く残されているように思う。一体彼はどのような形で問題を設定し、その結論に到達したのだろうか。方法には常に限界が存在する。一つの方法は新しい視野を切り開くと同時に、それ自身が別の展望を妨げる要因に転化する。過去の学問成果のより良い継承のためにも、この問題はつねにかえりみられねばならないだろう。オットカールの結論を安易に援用することは、あくまでもドグマを拒否した彼の意志にそむくことにもなる。もとよりそれは極め

て困難な課題である。特に、自分自身についてほとんど語ることのなかったオットカールについては、その困難は更に大きい。私は以下において、彼の著作を通読して得た印象のいくつかを記すことによつて、この課題への準備を行いたいと思う²⁾。

II

ニコラ・オットカールは、1884年3月12日にペテルスブルグの貴族の家に生れた。純粋のロシア人ではなく、その名が示すようにドイツ系であった。帝政末期の西欧派知識人のなかでも、特にコスモポリタンの精神の持主だったのであろう。ペテルスブルグ大学でフランス中世史家 J. Greaves につき、1907年にフィレンツェ史についての論文を提出して大学を卒業した。1911年から1914年までイタリアに留学し、帰国後は母校の私講師となった。1916年から当時新設されたばかりのペルム（モロトフ）の大学の教壇に立った。革命を経た1919年には、最初の著作である“*Copyty po istorii frantsúzskech gordoov v srédnie vekà*”をペルムで出版している。フランス中世都市の研究であり、後にイタリア訳されてフィレンツェで出版された³⁾。オットカールが

¹⁾ 星野秀利「オットカールのイタリア中世都市論に寄せて」『政経論叢』7の2、1959年。塩見高年「中世イタリア・コムネ研究の動向」『ルネサンスの世界』1961年。

²⁾ 彼についての資料はほとんどない。私が参照し得たのは E. Sestan によるネクロロジニア“*Rivista storica italiana*” LXXI, 1959. と、それを書き改めた“*Il comune di Firenze alla fine del Dugento, Firenze*”, 1962の序文だけである。このセスタンの文章は鋭い指摘に富むものであり、教えられるところが多かった。

³⁾ *Le città francesi nel Medio Evo*, Firenze, 1927.

祖国を離れ、イタリアに移住したのは1921年あるいは22年のことであつたらしい。フィレンツェの *archivio* での数年の研究の後に、Davidsohn, Salvemini に代表される在来のフィレンツェ史研究に対する徹底的な批判ともいふべき有名な“*Il Comune di Firenze alla fine del Duecento*”を發表し、イタリアのコミュニエ研究における指導的地位を確立したのは1926年のことであつた。1930年以降(1926年ともいわれる)フィレンツェ大学中世史講座の講師に就任し、のちにその正教授となつた。

1936年には、G. Gentile を主幹として編纂された“*Enciclopedia italiana*”に、彼の個別研究の総決算でありフランドルからイタリアに及ぶ諸地域の中世都市を対象とする抱括的な展望“*I comuni cittadini del Medioevo*”を發表した。以上の三つが彼の代表作である。そのほかには“*Studi comunali e fiorentini, Firenze 1948*”に集められているモノグラフィアと、フィレンツェ、ヴェネツィア、シエナの3都市それぞれの歴史と文化をとりあつた小冊子、それにロシア通史の著述がある。ある意味では、イタリア中世都市研究に決定的ともいふべき影響を与えた研究者の、40年以上の研究生活の成果としては、その量はあまりにも少ない。実証主義者であることに徹し、多くの著作を發表すること(*mania di scrivere*)と研究関心の広さとを混同しているとして歴史学界の傾向を批判しているオットカールは、自己の態度についての確信を持っていたらしい。しかし、37・8年以降その研究成果に乏しいことも又事実である。彼のネクロロジエアを書いた Sestan は、それを一つには彼の家庭的不幸のせいにしてゐる。しかしそこには、学問的慎重さや家庭的環境とは別種のより根本的な理由、たとえば彼の研究自体に何等かの要因が内在したかも知れない。出来るならば後に触れたいと思う。

III

オットカールの著作を通読してまず感じられるのは、その著しいポレミックとしての色彩であり、徹底的な実証性の強調である。その主要な実証研究二篇は、いずれも当時の支配的学説に対する実証的な批判として提起されたものであつた。フランス都市研究においては、Cambrai, Noyon, Beauvais, Soissons, Senlis の5コミュニエンがとりあげられ、それぞれの代表的個別研究の批判を通じて、P. Viollet 及び A. Luchaire のコミュニエ観を否定せんとするものであつたし、フィレンツェ研究においてもサルヴェミニ、ダヴィドゾーンの両大家が批判の対象となり、ここでも古典的コミュニエ観が否定された。いわば19世紀的古典学説批判の動きの一翼であり、それらの極めてシェーマ化された説を史料的に批判し、それを支えるリベラルな、あるいはロマン主義的な観念を拒否するものであつた。

まずフィレンツェ研究をとりあげてみよう。周知のごとく、オットカール以前のイタリア・コミュニエ研究は、いずれも都市と周辺領域(コンタード)との二元性の認識の上に構築されていた。すなわち、都市とコンタードの間には常に対立抗争が存在する。それは市民的共和的理念と封建的理念の争いであり、貨幣経済的・資本主義的経済組織と自然経済的・封建的経済組織の争いであつた。すなわち市民と封建貴族は自らの存立の基盤をかけて争うのであり、前者は活発な商業活動を通じて蓄積した経済力と軍事力を投入しつつ、いわゆるコンタード征服を遂行し、封建貴族を打倒して農村を解放する。こうして領域国家としてのコミュニエが形成され、ルネッサンスを生み出す基盤となる。たとえば P. Villari においては、この過程は *terzo stato* (*tiers état*) 形成のそれとして把握されるのであつた。この結果1250年の *Primo Popolo*、1282年の *Priori* 制の成立、1293年の *Gli Ordinamenti di Giustizia* の公布などの制度的変革が、都市における商工業者市民層によるヘゲモニー獲得の表現として高く評価され

る。

オットカールの批判が、この階級対立としての都市・コンタードの二元性の問題に集中していることは、あらためて述べるまでもないであろう。イタリア都市は、アルプス以北の都市のごとき *borghesia* の特殊世界ではなく、常に周辺農村地帯を結合し編成する中核であった。農村の土地所有者、封建的支配者層が都市城壁内に居住し、そこからコンタードへ支配権を行使する一方、商人層もコンタードに土地を持ち、封建的称号を獲得することを欲した。社会的諸関係はこのように都市に集中する。コンタードにおける利害の対立は常に都市内部に反映し、こうしてイタリアに特徴的な有力者相互の、家と家との私闘が現象する。いわゆる《経済の様相に対する政治の様相の優越》である。都市とコンタードの間には有機的連関が存在していたのであって、ここに基本的利害の対立を求め、それをコムーネ発展の基礎に置くことは誤りである。コムーネの領域国家的性格は後に獲得されたものではなく、コムーネは初発から《領域的、超社会的性格》を保持していたのである。常に商人層と封建的土地所有者との混淆が存在した。この特殊な性格を考慮することなくコムーネの本質を把握することは不可能である。歴史の中にただ機械的に *antitesi* を求めようとする研究者の態度が、多様な歴史的现实をいかに歪めているか、それが真の綜合をいかに阻んでいるか。これが彼の批判点であった。こうして都市支配者層の連続性が強調され、Primo Popolo 以下の変革は、外的政治的要件によって規定されて来るコムーネの対応の形態として把握される。

このようにオットカールの研究は、*contrasto sociale* とその基盤として想定される都市・コンタードの二元性の否定を通じて、《政治の様相の優越》が現象するコムーネの特殊性を認識するという方向を持っていたのである。コムーネの発展をそのまま資本主義的生産関係の発展と等置し、農村の解放と

賃労働の創出を強調する過去の研究の誤りは明かである。これに対するオットカールのイタリア的特殊性の側面からの実証的批判は、極めて有効であったし、又大きな意味をもっているといわねばならない。すなわち、都市研究がより広い視野のもとに、コンタードをも含めた社会構成、両者の相互規定の問題としてとり上げられるべき契機がすでに認められるからである。

オットカールの通説批判の態度は、やや異った形ではあるがフランス中世都市研究においてすでに明瞭に示されている。ここでも彼は《コンミュン運動》、《*borghesia* の解放》のごとき抽象的かつ不毛な概念を強調することによって、個々のコンミュンの個有の様相 (*fisionomia individuale*) が全く見失われていることを批判する。フランス都市についてのモノグラフィーは多く存在するが、みな驚くほど似ている。それらは一つの研究としか思えない。それは歴史的现实への直接的な接触を欠いているためであって、結局はコンミュンの歴史にも、又フランス・コンミュン全体の歴史にもならない。それはアプリアリな一般化にすぎないのであり、真の *sintesi* とはいえないのである。このように彼はまずコンミュンをその多様性において把握することを主張し、ほぼ同一のコンミュン状の背後に存在する内部構成の差を史料的に実証せんとする。更に彼自身の内的要請を暗示するものとして、もう一つ見逃せないテーマが存在する。すなわち、中世都市一般の歴史における市民の誓約団体 (*conjuratio*) と都市領主に対する暴動の重要性を拒否するものである。オットカールによれば、これらの北フランスの都市においては、都市はコンミュン以前に特殊な法地域として都市領主からも認められ、すでにプリミティブな自治を *Schöffen*, *scabini* を通じて獲得していた。商工業発展の基礎的条件たる平和維持のためにすでに《一般的な結合運動が存在し、都市領主の側もこれを自己に有利なこととして是認してい

た。しかるにこの市民的利益が、何らかの外的要因によって妨害されるときに、これを排除するための *conjuratio* が組織される。*conjuratio* は目的でも本来的な要件でもない。商工業活動の発展と自治獲得の運動が常に *conjuratio* を形成し、都市領主を排除する方向に作用するものではない。それはいわば特殊な対応形態なのである。*conjuratio* とその軍事力は、ある時には都市領主へ向けられたが、又ある時は都市領主と協力しつつ他の封建領主との闘争に向けられていたのである。結局オットカールにおいては、北フランスにおいても都市自治の進展は本来的には漸進的に行われたのであった。上級封建権力がそれを有利と認めていたからである。いかえれば、中世都市は常に封建機構内部の一機関として機能していたからである¹⁾。

IV

1930年に彼は学界展望“*Osservazioni sulle condizioni presenti della storiografia in Italia*”を公表したが、上の問題に触れている部分を要約すると次のごとくである。——都市研究において批判されねばならないのは《*semplicismi materialistici*》(唯物論的単純論)とそれを生み出すメンタリティである。《常に *contrasto sociale* が問題の中心であり、歴史学の課題はその時点においてすべてを支配し決定する *antitesi*、すなわちあらゆることを解き説明し得るかぎを発見することにつきている。》コムーネにおいて社会的経済的対立が存在したことを疑うものはないが、それがコムーネ史の中心的内容として考えられ、研究者の関心を完全に集中してしまうのはなぜだろうか。それは *vita* の個々の局面のみ

をとりあげ、それを固定的な具体的存在と考える精神態度、《哲学的ではなく心理学的意味における唯物論》、すべてを《*materializzare*》(物質化)する態度によるものである。これは歴史に対する態度としては誤っている。《すべてのコムーネ史研究がそこに集中している経済的社会的対立という〈かぎ〉は、実際には何の役にも立たない。その〈かぎ〉を用いることによって歴史家は……コムーネの *organismo* の歴史の最奥の本質的な諸問題の外側に、常にその表面にとどまるからである。》このように《全体の局面にすぎず、全体の *vita* との関連においてのみ意味を持つ *contrastisti*》を唯一の問題とすることによって、コムーネの統一のヴィジョンの獲得は阻まれているのである。——

以上から明かなように、オットカールは古典学説の *contrasto sociale* を批判し、それを *semplicismo* の名において拒否することを通じて、都市・コンタド関係におけるイタリアの特殊性の認識に到達し得たのであった²⁾。こうして彼のヨーロッパ中世都市論はすぐれて社会学的な類型論である。アルプス以北の都市は、周囲の世界から区別される特殊経済活動を行っている人々の住む土地に限定され、経済的環境がまさに法的環境に一致するのに対し、イタリア都市はより包括的な法的政治的機能を持つ。プロヴァンス、ラングドックの都市はこの中間形態を示す。アルプス以北においても、個々の都市はそれぞれ封建権力、王権のありかたとの関連において個有の型を持つ。ここで注意しておかねばならないのは、この型の差はあくまでも現象的な社会構成の差として把握されているのであって、精神史的意味での市民の純粋性あるいは等質性の問題は全く考察

¹⁾ もとより共同体としての観点は欠除している。セスタンは《オットカールにおける人々は……自分が何処へ行くかを知らないだけでなく、何処へ行こうとも欲していない》と批判している。“*Il Comune di Firenze ecc*”, 1962, p. XV.

²⁾ 亡命者としての態度と結びつけたイデオロギー批判は可能であるが、ここでは立ち入らないこととする。

の対象とされていない。ウェーバー的に解釈することは誤りであろう。さて都市の独立性の問題については、次のごときは指摘が興味深い。すなわち、アルプス以北の都市は、純粋に *borghesia* 的世界であり、封建社会における孤島であるが故に、それ自体自立することは出来ない。それは常に領主あるいは国王に従属し、その権力の一機関としての意味を持つ。これに対しイタリア都市は、経済的には純粹でなくいわば半封建的領主的であるが故に完全に独立し得たのである。このようにオットカールの中に萌芽的に現れている中世都市を封建社会の構造の問題としてとりあげる視角こそ、我々がまず継承しなければならない点であろう。

オットカールは *semplicismo* 批判という姿勢を通じて個別性の認識に到達し得た。シェーマを拒否し、*contrasto sociale* の普遍性を否定することによって、それは極めて強力な批判たり得た。しかしそれは自分自身をも制約する。体系化は当然困難となる。こうして彼は《*senso di unita*》(統一の感覚)、《*sensibilita storica*》(歴史的感受性)という観念に依存しなければならなかった¹⁾。そこでは彼の実証性は貫徹し得なくなっているのである。

オットカールの限界はまさにここにある。彼の鋭い歴史的感覺が抽出したイタリア的特殊性は如何にして形成されたのか。その生成過程を分析の対象とすることは出来ない。それは与えられたものであり、超歴史的な存在である。その与えられたものが、外的政治的要因によって如何なる変化を示すか。そこに研究の中心が存在する。発展の契機は見失われ、段階規定は欠除せざるを得ないのである。フランス都市研究開巻冒頭の言葉はこの意味で暗示的である。《カンブレの都市諸制度の研究を開始する前に、次の点を明かにしておきたい。コンミューンの自治

の確立のはるか以前に、都市はすでに具体的な法的な統一体として考えられていた。》この《具体的な法的な統一体》を前提として彼の研究は開始される。この前提はオットカール自身の射程距離内には存在しないのであった。

V

1930年代中葉以降、もはやオットカールの研究が、実証研究としては進展しなかったのは何故だろうか。その理由の一部は、前述した彼の方法自体の中に求められるであろう。古典学説への批判として提起された彼の研究はその限りでは極めて有効であったが、多様性と個別性の強調によって、その新たな総合への上昇は極めて困難であった。更にもう一つの大きな問題がある。オットカールによって提起された問題を、理論的にも実証的にも深化させるべき積極的な批判が、イタリアの学界の中から生れる可能性がすでに失なわれつつあったのである。過去のイタリア史学の成果を検討するとき、30年代以降実証的な社会経済史の業績が極めて乏しいという明瞭な事実遭遇する。これは単なる偶然ではない。外からはファシスタによる進歩的な歴史家への圧迫が始まり、内からはクローチェの影響のもとに歴史的関心の大きな転換が生れつつあった²⁾。法制的経済的諸関連において表現される社会構造の分析を目的とする過去の歴史学は、結局歴史における単なる形骸のみを追求するものであって、精神のない脱け殻にすぎない。これからの歴史学はすべからず精神の歴史、広い意味での政治行動を決定する人間精神の歴史でなければならない。このような主張が学界、ジャーナリズムを風靡し、研究者の関心は急速に政治史、外交史、国家史へ集中して行ったのである。このような学界状況、社会経済史学の急速な退潮と政治史へ

¹⁾ 彼自身これが《*concezioni filosofiche*》に高められていないと述べている。 *Studi Comunali ecc*, p. 103.

²⁾ すでに1925年には、ファシスタの迫害によってサルヴェミニが亡命を余儀なくされている。

の全面的転換は、すぐれてイタリア現代史の問題であるともいえよう¹⁾。もはやオットカールの研究に対する理論的実証的な批判が出現する可能性は存在しなかった。彼の論敵は彼の批判によってではなく、外的な条件によって消滅してしまったのである。彼は古典学説批判の大家として、そのままの形でとり残されてしまったのではないだろうか。

前にあげた1930年発表の学界展望は、この意味で奇妙な印象を与える論文である。そこで彼は《simplicismo》を批判する一方で、Volpe のいわゆる《転向》問題に触れている。——ヴォルペはこの *simplicismo* を免れていた唯一の歴史家であった。彼はマルクス主義の古典的公式の影響を受けたし、又社会的経済的対立の意義を強調したこともある。しかしヴォルペにおいては、それ等は目的でもそれ自体の価値でもなく、より広い総合の諸局面、諸機能として理解されている。こうしてヴォルペは初期コムーネを *contado feudale* に対する *centro borghese* としてではなく、最初からコンタードの大部分が参加し周辺世界の諸関係、諸利益が結合しているより広い *organismo* として把握した唯一の研究者であった。彼はマルクス主義からその最も肥沃な部分、総合と相互連関の観念を得たのである。しかるにヴォルペは、最近自分から過去の研究における国家観念の稀薄さや階級概念の優越を指摘して、その価値を限定しようとし、更に社会史から政治史への転向を語っている。彼は自分の研究の価値について誤解しているといわねばならない。クロウチェはヴォルペに対し、彼の《中世》が精神を持っていない (*senza anima*) と非難した。しかし彼の歴史学の本質は、歴史的現実の個々の現象、局面から出発し、それをより広い統一のうちに吸収するその感覚のうち

にある。ヴォルペにおいて直接の対象が変化したとしても、原則、方法、歴史観が変化したのではない。彼は自分の転向について語ってはならない——このように述べた後に、オットカールは《もしそれが統一と融合の感覚を確保しているならば、私は〈唯物論〉を怖れない》とつけ加えているのである。この言葉のうちに、オットカールの孤立、学界の地滑りの状況といわゆる《新歴史学》に対する疑問がうかがわれるのではないだろうか。

オットカールの提起した問題は極めて重要である。都市・農村関係において社会構成の特質を把握するという視角は、ぜひとも継承されねばならない。その際に《イタリア的特殊性》を発展の契機において位置づけること、すなわちそれが歴史的に形成され、一定の条件の下に再生産されるものであるということが、まず留意されねばならない。都市がコンタードを統合し編成し得た社会経済史的条件、地理的環境、耕地・定住形態、都市内外における市場構造、労働力の存在形態、更にその上に構築される権力構造などの分析が必要とされる。すぐれて地域史的な研究方法が導入されねばならないだろう²⁾。こうしてオットカールの研究は、まさに私達の研究の出発点たり得るものなのである。

しかしオットカール自身は遂に弟子を育てることは出来なかった。すぐれた個別研究“*L'Emigration de la campagne à la ville libre de Florence au XIII^e siècle*”を書いた J. Plesner は早く没した。N. Rubinstein にも若干のモノグラフィアがあるだけである。オットカールが論文や講演において名をあげて期待していた R. Piattoli や C. Pozzesi などはどうなったのであろうか。彼の死後も記念論文集の刊行は見られなかったのである。

¹⁾ 当時の学界状況については、「*Rivista storica Italiana*」LXXII, N. 4. F. Chabod 追悼特集号所収の回想録、評論が参考になる。

²⁾ この意味では E. Fiumi の *Fioritura e Decadenza dell'economia fiorentina*, Arch. St. It. 1957~1959 は重要である。ただし、そのやや性急な文化史的位階づけには疑問の余地がある。